

3. コーンビーム CT で歯性上顎洞炎所見を有する者の疫学的検討

An epidemiology Study of Odontogenic Maxillary Sinusitis Diagnosed by Conebeam CT

○東海林 理, 泉澤 充, 佐藤 仁,
星野 正行, 高橋 徳明, 六本木 基,
田中 良一

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
歯科放射線学分野

【目的】 歯性上顎洞炎は歯の根尖病巣, 歯周炎, 根管治療中のリーマーなどの突出による感染, 抜歯時の洞底穿孔などの歯科的外傷による歯性感染に起こる。

近年コーンビーム CT が上顎洞疾患の検査にも使用されている。コーンビーム CT で得られる画像は空間分解能が高く, 歯性上顎洞炎の病態が描出できる。今回我々は, コーンビーム CT を用いて上顎洞の検査を行い歯性上顎洞炎と診断された症例について, その背景因子, 画像所見の特徴および病変分布等を明らかにするために, 上顎洞炎の併発の無い歯根嚢胞症例と比較検討を行った。

【対象と方法】 対象は 2013 年 2 月から 2017 年 8 月までの間に頭部用コーンビーム CT 装置を用いて撮影し歯性上顎洞炎と診断された 127 例である。比較対象として 165 例の歯根嚢胞患者のデータを収集し, 年齢, 性別を用い傾向スコアマッチングにて対照群の抽出を行った。最終的に歯性上顎洞炎の発症のある群とない群で, 各群 127 例ずつ計 254 例にて検討を行なった。

比較検討項目は腫脹・疼痛などの症候の有無, 病変の左右差, 洞口腔瘻の有無, 歯根破折の有無, 根管充填の状態, 歯種である。歯種は切歯, 犬歯, 小臼歯, 大臼歯に群分けした。

【結果】 症状の有無では歯根嚢胞群で有意に症状を有したものが多く, 歯性上顎洞炎群では無症候の症例が多かった。歯根破折群, 洞口腔瘻群, 根管充填不良群は歯性上顎洞炎群で有意に多かった。また, 歯種では, 歯根嚢胞の発生は切歯に多く, 歯性上顎洞炎では大臼歯での発生が有意に多かった。

【結論】 今回の調査では無症候性の症例が有意に多く見られた。種々の原因により形成された歯性上顎洞炎が慢性化しているためと考えた。また, 歯性上顎洞炎は従来の報告同様に大臼歯を責任部位とするものが多かったが, 根管充填不良例に多く見られることが明らかになった。

4. ショートインプラント上部構造装着後 3 年経過症例に関する臨床的調査

Clinical survey of three years prognosis after the placement of the superstructures on short implant

○池田 功司, 小山田 勇太郎, 野尻 俊樹,
菅原 志帆, 福德 暁宏, 折祖 研太,
横田 潤, 畠山 航, 高藤 恭子,
高橋 敏幸, 鬼原 英道, 近藤 尚知

岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座補綴・インプラント学分野

目的: インプラント体埋入手術時には解剖学的要因または, 骨移植等の外科的侵襲を回避するためにショートデンタルインプラント (SDI) がしばしば使用される¹⁾。今回, SDI を適用し, メンテナンスへ移行した症例の調査, 検討を行ったので報告する。

対象と方法: 調査期間は 2009 年 7 月から 2018 年 7 月までとし, 被験者は当科にて SDI 埋入, 上部構造装着後 3 年以上経過している患者とした。今回は, 長さ 7mm 以下を SDI と定義した。各項目に関し調査した。

結果: 抽出された患者は 58 名 (男性 20 名, 女性 38 名) であった。埋入されたインプラント体は 79 本であった。上部構造はブリッジが 13 例, 連結冠が 31 例, 単冠が 17 例であった。骨移植を行ったのは 46 本であった。術後トラブルは上部構造の破損が 13 例, インプラント周囲炎が 1 例, インプラント周囲炎による除去が 2 例であった。

考察および結論: SDI の使用は骨吸収に起因する問題の解決につながる事が示された。しかし, 埋入時にインプラント体頸部への骨移植を必要とした例が多く認められた。しかしながら, 骨採取量の低減したことにより, 侵襲の軽減が